

南アフリカの「カレード社会」に生きたベッシー・ヘッド

著者	楠瀬 佳子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1997-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008430

南アフリカの

「カラード社会」に生きた

ベッシー・ヘッド

楠瀬佳子

1991年8月、はじめてケープタウンを訪れたとき、私はなにはさておき District Six へ行きたいと思った。テーブルマウンテンが一望できる町中のホテルに落ち着いたあと、フロントの人に District Six の場所をたずねた。その人は「すぐそこですよ」と教えてくれた。観光客用の地図には Zannebloem とあり、再開発地域と記されていた。ただ広い草むらの空き地の真中に立ち呆然とした。南側のハイウェイ沿いには真新しい瀟洒な家とケープテクニコン専門学校があった。古ぼけたレンガづくりの教会とモスクだけがもとの姿で残っていた。カースルの東からデヴィルス・ピークのふもとに広がるかつての District Six がそっくり陰も形もなく消えていた。草むらに転がるアルミニウムの皿やプラスチックのコップを見て、住民の多くは荷造りする暇もないほどにブルドーザーに追い立てられたのだろうと思った。集団地域法により5万人の住民が66年にケープフラッツへ強制移住をさせられ、この地は「白人地域」と宣言されたのだった。19世紀末から20世紀にかけてさまざまな民族や階層の人びとが身を寄せあい独自のコミュニティ文化を作り上げ、ケープタウンの

「カスバ」「ハーレム」「イースト・エンド」と呼ばれていた。政府は人びとの怨念を刻み込んだ District Six の精神文化を破壊できずに、草むらのままに放置するしかなかったのだろうか。

ときおりインド洋と大西洋の気流がぶつかって発生する雲が、雄大なテーブルマウンテンにレースのテーブルクロスのようにやさしく被いかぶさる美しい光景とは裏腹に、いまや District Six はアパルトヘイトの暴力性を象徴するものとなった。政府が法律という名をかり、力づくで抹殺しなければならなかった南アフリカの人びとの文化とはいったいどういうものなのか。

District Sixの住民たち

アレックス・ラ・グマやリチャード・リップ、アダム・スモールなどの作家や、世界的に著名なジャズピアニストのイブラヒム・アブダラーはこの District Six で育ち、ここを舞台として南アフリカの状況を訴えた。ベッシー・ヘッド (1937~86年) も60年代のはじめにここで暮らし、作家として歩みだすきっかけをつかんだ場所だった。

私はケープタウン滞在中に、District Six で暮らしていた人々から多くの思い出話を聞いた。誰もがつい昨日のこのように生き生きと語った。強制移住の時の悔しい思いが込みあげてくるのか涙まじりになることもある。この記憶がアパルトヘイトへの怒りの原点であり、アパルトヘイト廃絶への闘志となったという。人びとの暮らしは貧しかったとはいえ、暖かい人情と文化が人びとを支えあい、励ましあったのだと懐古する。

当時のベッシー・ヘッドを知る詩人のジェームズ・マッシュューズは、ヘッドが間借りしていた部屋の様子を詳細に語ってくれた。壁一面に写真や新聞記事を貼り、できるだけ楽しく賑やかな雰囲気を作ろうとしていたが、ひどく貧乏をしていたので、パンや果物をよく差し入れたという。ヘッドがボツワナに亡命した後も手紙でお互いの状況を報告しあい、精神的に支えあったようだ。ヘッドが自殺未遂を図るほどひどく落ち込んでいた時、ジェームズはボツワナへ飛んでいけなかったことが唯一の悔いだと何度もくりかえした。

このようにして私は、ベッシー・ヘッドとケープタウンの関係が精神的に深いことを知った。

ベッシー・ヘッドのこと

ベッシー・ヘッドの母親は白人で父親はアフリカ人であったために、背徳法により、ヘッドはナタール州のピーターマリッツブルグの精神病院で生まれた。裕福な家庭に育った母親は家名を汚したとして精神病院に幽閉されたのだった。だが、ヘッドは自分の出生について、「南アフリカのアパルトヘイトが生み出した悲劇を体現したものであり、決して特異な存在ではない」ととらえている。

ヘッドは「カラード」人口が非常に少ないダーバンで育った。誕生直後からしばらくは「カラー

ド」の里親に育てられ、「カラード」のための孤児院セント・モニカズ・ホームに移され、そこで教育を受けた。その後クレアウッド・カラード学校の補助教員になったが、バンツ教育が強化されるにつれ、人種差別教育に手を貸すことに疑問をいだきはじめた。これまでの人生は、「カラード」社会の中だけで充足し、ある意味では庇護されていた。しかし、1950年に導入された人口登録法により、南アフリカはより徹底した人種隔離社会へと移行し、法的にも社会的にも比較的保護されていた「カラード」への締めつけも強化されていった。

やがて、新しい人生を求めたベッシー・ヘッドはケープタウンで暮らすことを思いつく。そこには身寄りも知り合いもないが、「カラード」が住民の多数派を占める土地での再出発に期待した。

ケープタウンは、ヘッドが慣れ親しんでいた「カラード」社会とはまったく異なっていた。南アフリカの白人侵略の歴史が、ケープタウンに「カラード社会」「奴隷制社会」を形成することからはじまったために、ケープタウン人口の54%を占める「カラード」が、ケープタウンの27%の土地に住んでいた。立法首都であることから、リベラルな白人たちは新聞や雑誌を発行し、早くから人種差別法に抗議していた。英語が堪能であるということで、ヘッドは「ゴールデン・シティ・ポスト」紙の裁判所詰めの記者として臨時採用され、「カラード」やアフリカ人に対する不正義や非人道的な待遇をつぶさに観察することになった。その結果、政治意識に目覚め、「カラード」としてアイデンティティを強く意識しはじめた。

しかし、ヘッドにとって言語の問題は大きな障壁であった。ケープタウンの「カラード」の第一言語はアフリカーンス語だった。ヘッドが育ったダーバンは、ズールー語を第一言語とする人びとが多数派を占め、次に多いインド系の人びとは英

語で生活をしてきた。ヘッドはズルー語が話される環境になく、英語の世界だけで生活してきたために、ケープタウンの「カラード」と十分にコミュニケーションがとれなかった。そのために、ヘッドは、アフリカンス語を話す「カラード」を、白人社会に同化しようとする上昇志向の強い人びとであり、歴史的に特権的な位置を与えられてきたとみなした。したがって、ヘッドは、カラード地区である District Six に住む英語を話す下層階級の労働者と自己同一化しようとした。

ヘッドは1958年9月26日付けの手紙にこう書く。

「ここ（ケープタウン）のカラードの生活は奇妙で当惑する。厳密なカースト制度が存在していて、上流階級のカラードはかなり皮膚の色が白く教養がある。中流階級は工場労働者で非常に貧しく、道徳的には墮落している。（略）何人かの家に出かけたことがあるが、温かく迎え入れられなかった。私がどの階層にも属していず、考え方が洗練されていないことをすぐさま嗅ぎ分けたようだった。（略）私は何らかの社会階層に属しているなどと考えたことは一度もないが、おそらく私は下層階級の人間だ。そういう人びとの中に友人が大勢いて、彼らののんきな気取らない社会で幸福感を味わっている」。

短編の中でもこう書いている。「私はケープタウンが大好きだ。ケープのカラード社会で作家にも、しっかりとした個人主義者にもなれたし、温かさ、愛情、疎外とは正反対のもの、少なくとも人間への帰属意識が持てた」。

ベッシー・ヘッドは、ジャーナリストのハロルドと新婚生活を送った District Six で住民として暖かく受け入れられたことに、一種の喜びを感じた。生まれてはじめての経験だった。

ところで、ベッシー・ヘッドの第一作である小

説『カーディナルズ』（1993年に死後出版）は、District Six の「カラード」社会を舞台にした父と娘であることを知らない男女が愛しあう物語である。近親姦がテーマであるためにどの出版社も敬遠したのであるが、ヘッドの文筆活動の修行時代を知るうえでこの小説は重要である。ヘッドの誕生日と主人公の誕生日が同じであったり、白人女性が生まれたばかりの赤ん坊をカラードの家庭に里子として出しにくる様子や、「ゴールデン・シティ・ポスト」紙のジャーナリスト見習い修行中の様子などから、主人公はヘッド自身であると読める。ヘッドは実父が母の実家の厩番であったこと以外にも知らされていないために、この作品で理想とする父親像を描こうとしたのであるが、夫ハロルドとの情熱的な出会いとも重なる。半ば自伝的であり、半ば空想的小説でもある。この小説の冒頭で District Six についてこう述べている。

「そこはトタン屋根の小屋が密集するスラム街だった。片側には1マイルも墓場がつづき、もう片側にはごみためと海がある。国道がごみためとスラム街とを分けていた」。

確かに、District Six はスラム街の様相を呈していたが、ここでの人びとの生活はヘッドがいうように、人情味があった。District Six の住民であったアダム・スモールは「そこにはあらゆる種類の人生が入り交じっていた。何千人もの人びとにとって、文化のメッカなのだ」と語っている。

ジャーナリスト兼作家のブライアン・パローはこう述べた。

「ハノバー通りを、人びと、車、手押し車、バス、馬車が洪水のように通り、小さな子供たちは木箱で作った手押し車で斜面を滑りおりる。はしゃいだり、笑ったり、やじったり、口笛をふいたり、叫んだりする人の群れが行きかう」。リチャード・リップは子供時代を振り返る。

「スラム街はしめっぽく、汚く、じめじめしていた。子供のころ、私たちは継ぎ接ぎだらけの服を着て、裸足で走りまわっていた。そして酔っ払いをはやしたてたり、通りで喧嘩している裸の子供たちに卑猥な穢をとばした」。

つまり、誰もが District Six の人びとの生き生きとした生活模様を記憶し、強力なコミュニティ意識で結ばれていたのである。ヘッドにとって、共同の炊事場で台所道具を共有して料理をつくったり、食べ物を分かちあうことも新たな経験であった。生活は貧しかったが、人生の機微に触れていた。ヘッドはその時の模様をこう描く。

「District Six では、誰にも私生活などなかった。隣人は他人のことに首をつっこみ、どんな過ちでも気にしなかった。いざとなれば、法律に違反してでも味方になる。お互いを気づかう、本当にすばらしい陽気な人たちだった。私たちはみんな重なりあって暮らしていた」。

ボツワナでの暮らし

このようなコミュニティへの帰属意識、お互いを助け合う温かな人情味が、ベッシー・ヘッドにアパルトヘイトという苛酷な政治的経済的困難を克服させた。District Six は確かにヘッドに生きる喜びと作家としての自信を与えた。だが、反アパルトヘイトの活動に加わったために絶えず公安警察から厳しい攻撃を受けた。やがて、次第に夫との折り合いも悪くなり、夫の亡命をきっかけに、ヘッドは幼い一人息子とともにボツワナへ亡命した。亡命先のセロウエは南部アフリカでは最大の農村社会であり、かつてはツワナ社会の首都として栄えたところだった。ツワナ語もアフリカのどの言語も話せないヘッドは、セロウエで「カラード」としての自己存在を再び突きつけられた。民

族基盤としての独自の言語や文化から完全に疎外され、精神的には一種の宙吊り状態におかれた。そのためにヘッドは、精神と肉体のバランスを欠き、幾度か精神障害を被った。しかし、ヘッドは書くことによって自己の精神的平衡を保った。それは、District Six で経験したように、ボツワナ社会に自己同化しようとする葛藤の軌跡でもあった。晩年、南部アフリカの歴史に深い関心を寄せ、村人から聞き書きして民衆史を構築しようとしたのも、コミュニティへの帰属意識を願ったからにはほかならない。つまり、ヘッドにとって、自分史や民衆史を書くことは南アフリカに生まれたことの意味を歴史のなかに位置づけ、自己の帰属意識を確認する営為でもあった。

最終的にヘッドはアパルトヘイトが規定する人種を拒否して、みずからが名づけた「新しいアフリカ人」になることで自己のアイデンティティを獲得した。そのプロセスはまさしく壮絶な肉体的・精神的闘いの連続であり、「カラード」という人種の強迫観念との葛藤だったといえる。

最後に、ジェームズ・マッシュューズ宛ての1974年5月22日の手紙を紹介しておく。「南アフリカでは作品が書けたとは思わない。書くことは着物を着るのとたいして変わらないと思う。(略)ここ(ボツワナ)では徐々に何枚かの着物を着るようになった。私はこの国のすべてが大好き。(略)これと同じ幸福感を経験したのはケープタウンだけ。ボツワナで毎日自転車に乗っていると、誰もが私にこんにちわと挨拶してくれる。(略)休日でも District Six から出ていけない二人のことを書いた小説を覚えているかしら。私はそれと同じ病にかかっている」。

明らかに、ケープタウンの District Six はヘッドにとってもうひとつの「ホーム」だったのだ。

(くすのせ・けいこ/京都精華大学)